

昭和63年度 三河国分寺跡 発掘調査の概要

昭和60年度から始まった国史跡三河国分寺跡の発掘調査も、今年で4年目となります。調査を重ねるごとに新たな発見があり、千二百年以上も前に建てられた寺院の輪郭が徐々に判明してきたわけですが、今年は今までに不明確であった寺院の北限の追求と塔基壇の調査を目的として、計250㎡の発掘調査を実施しました。

1. 過去の調査概要

昨年までの過去3年間にわたる調査で、^{こんどう}金堂跡・^{こうどう}講堂跡・塔跡・東回廊跡・西回廊跡・東面築地跡・西面築地跡の位置が明らかになっています。(右図参照)

調査前までは、寺域の東西中央に伽藍中軸線がらんがおかれると推定されていましたが、調査の結果、現在の曹洞宗国府山国分寺の本堂の下に金堂跡が存在し、回廊が金堂にとりつくことが判明しました。つまり、伽藍中軸線は、寺域の東寄り3分の1のラインに寄り、塔は、回廊の外側の西寄りの位置に配されるわけです。このような伽藍配置は、国分寺としては一般的な形態といえます。

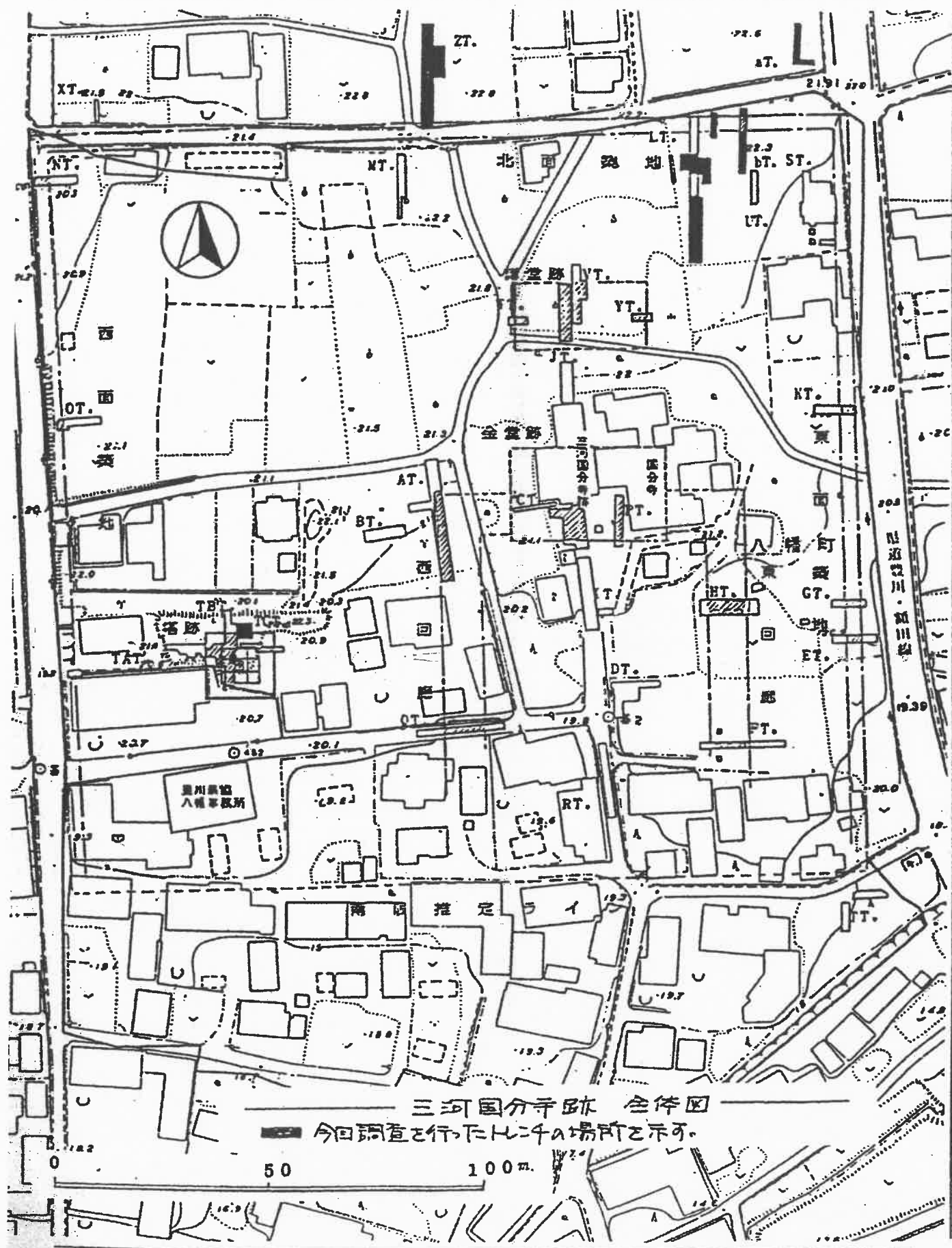
2. 今年度の調査の成果

(イ) 寺域北限の追求

昭和61年度の調査において、北面の築地ついでと推定される遺構を確認しましたが、その後の調査で、それは別の遺構と考えざるをえなくなりました。そこで、今回は史跡指定地外にも調査の手をひろげ、築地塀の跡などの寺をかこむ遺構の確認につとめました。

その結果、指定地北東隅の畑地において、築地塀の基礎部分と考えられる痕跡が確認され、その西側の延長は上宿へ向かう東西方向の道路のほぼ真下に延びる可能性が大となりました。

これにより、三河国分寺は従来から推定されていたように、東西・南北とも一辺600尺(約180m)の寺域を有していたと考えられます。また、一昨年度調査を行ったLトレンチ付近では、多くの瓦が出土しており、講堂の北側には、何らかの瓦葺きの建物(僧坊?)が存在したと推定されます。



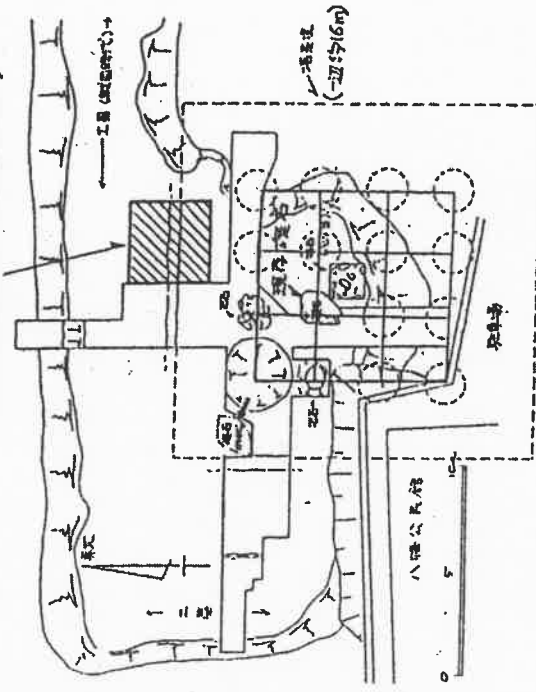
三河国分市跡 全体図
 今日調査を行ったところの場所を示す。

0 50 100m

● 基壇の化粧

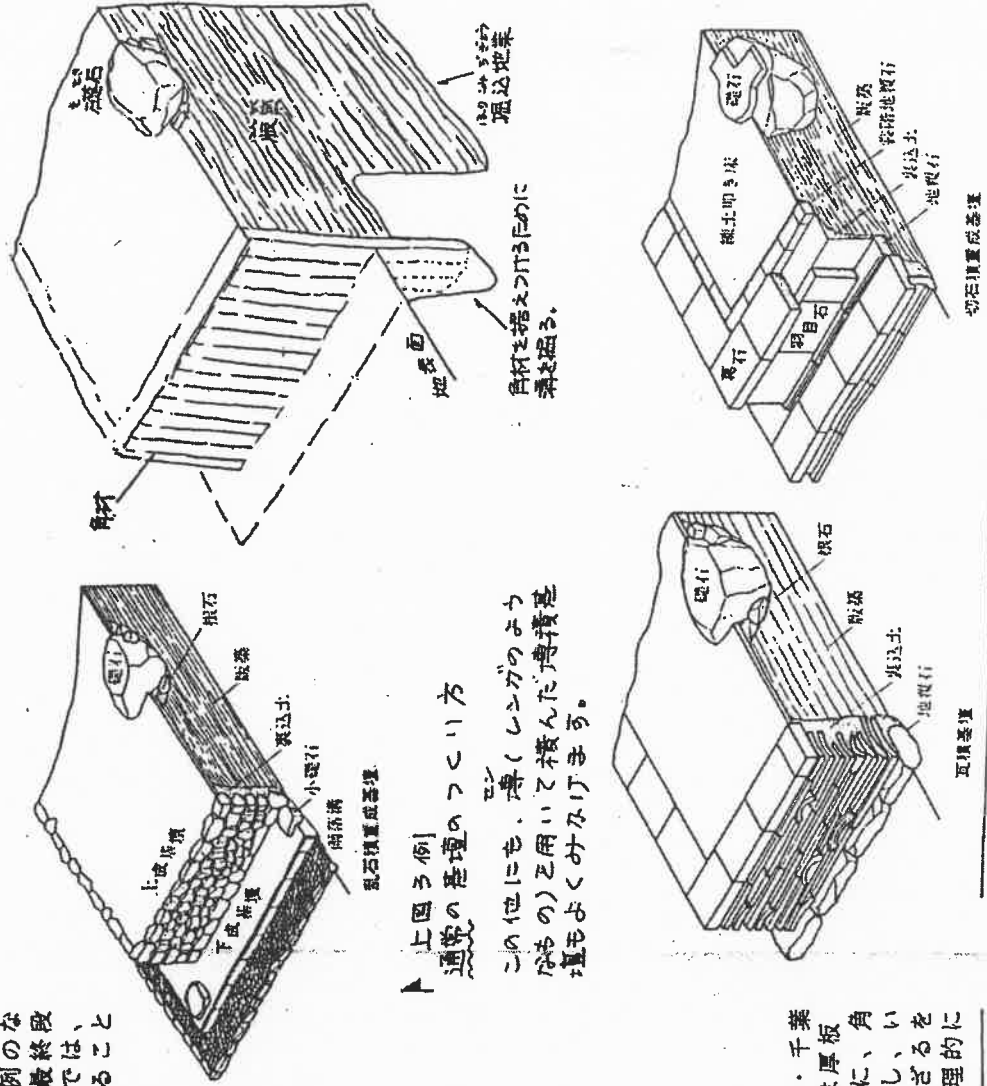
(口) 全国的にも珍しい塔の基壇化粧は、一辺 1.6 m、高さ 1 m 以上の基壇の上の調査で、三河国分寺が判明しました。残念ながら現在礎石は 1.7 m の上に建てられ残っています。基壇の南側と西側が削られ基壇の形がひどく変えられた時に土墨(はぐい)を築くために土を盛ったため、基壇の北側と西側の残り具合は良好で、これが思いがけない発見には驚かされました。通常、塔や金堂の基壇化粧(化粧)は、石や瓦あるいは埴(はぐい)などを用いて行われ、三河国分寺塔跡では、木(角材)を用いた基壇化粧を保護していることが明らかとなり、全国的にもあまのりな調査の最終段階で、断面の基壇が一部残っており、その様子を具体的に知ることも出来ませんでした。

今回の調査場所(基壇の化粧)



は、この塔の基壇の土を積んでゆくり丁寧にあたりにあたるように敷きつめられ、その下側約 3 分の 1 を基壇の外装に使用したもので、長さ約 2 m 程のもの、その下側約 3 分の 2 が現われていたものと推定されます。

【三河国分寺塔基壇様式図】



上図の例
通常の基壇のつくり方
この他にも、薄くレンガのよう
なものを用いて積んだ磚積基
壇もよくみられます。

奈良時代頃の木造基壇外装の例としては、新潟県の横滝山麁寺・千葉県の小食土麁寺(せしどじ)などの例が知られていますが、これらは厚板を用いて化粧を行ったと考えられ、三河国分寺塔跡のように、角材を主に用いたと推定される例は少ないです。しかし、いづれにせよ、何故このように化粧を行ったのかは興味深い点です。物理的に得ず、何故このように化粧を行ったのかは興味深い点です。

(ハ) 出土遺物

今回の調査では、昨年の塔の水煙すいえんの破片のような珍しい遺物は出土しませんでした。が、四年間にわたる調査で、瓦を中心とした多量の遺物が出土しています。

右図の拓本は、三河国分寺跡出土軒丸瓦・軒平瓦の文様であり、単弁8弁蓮華文れんげもん軒丸瓦・均整唐草文きんせいからくさもん軒平瓦を基本のタイプとして、いろいろな文様のあることがわかります。これらの瓦の文様のデザインは、いったい誰が行ったのでしょうか。

興味深いのは、これらの瓦の文様が、駿河・尾張・飛騨・越中などの近隣の国々の国分寺瓦の文様に似ていることであり、特に越中のものとは非常に似通っています。

三河国分寺跡では、軒丸瓦・軒平瓦ともに10種類以上の文様もんようが確認されており、この他、鬼瓦の小片なども出土しています。これらの瓦の多くは、三河国分寺跡の瓦の文様に共通します。

※ 三河国分寺の塔は、出土した土器や瓦から、平安時代の終わり頃までには荒れ果て、消失したと考えられますが、焼け土や炭を含む土の中から、壁に使用したと推定される「しっくい」のかけらや、塔を飾った銅製品の小さな破片が数多く出土しています。

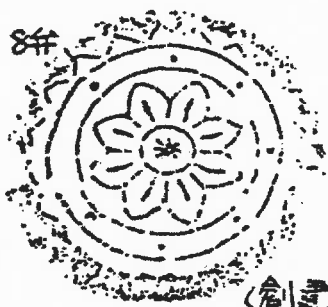
3. ま と め

四年にわたる調査で、三河国分寺跡の伽藍・寺域の確認という当初の目標をほぼ達成することができ、調査は今年度でひとまず終了する予定でいます。

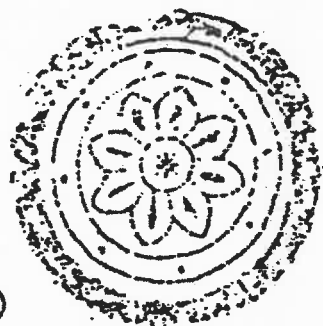
まだ、中門・南大門・僧坊や他の建物などの位置は明らかになっておらず、調査を行ったのは、寺域のわずか3パーセントに過ぎませんが、今後、塔北側の空間に存在すると推定される寺院の経営部門の調査を行う機会があれば、また新たな発見があることと思われれます。

国史跡三河国分寺跡は、奈良・平安時代の国分寺という寺院址であるばかりでなく、古くは、先土器時代・弥生時代の遺跡として、また中世には砦として利用された生活の条件の良い土地であり、多くの歴史が土に刻まれている貴重な遺跡です。

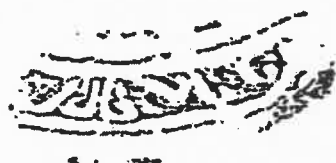
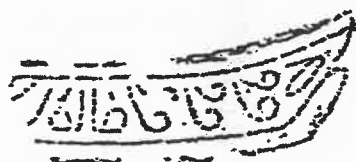
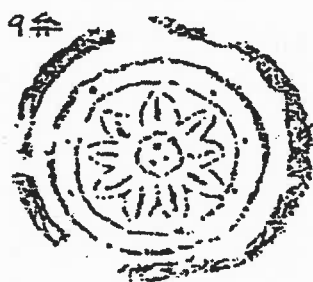
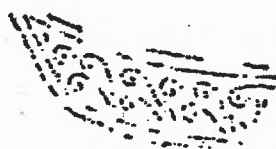
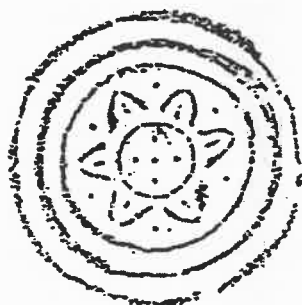
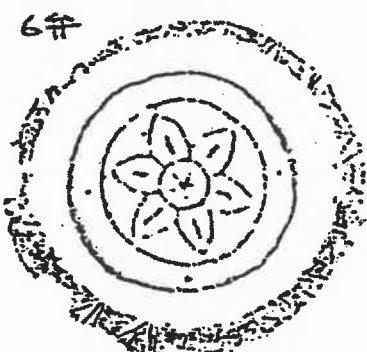
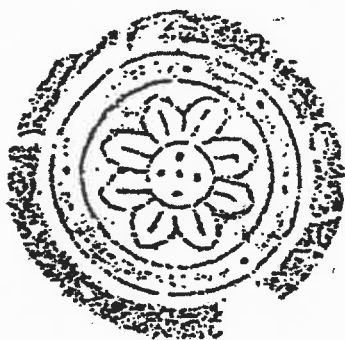
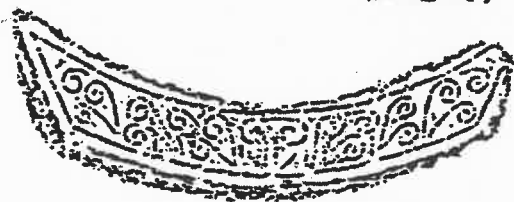
現代に生きる私たちにとっても、歴史は今をうつしだす鏡であり、このような貴重な遺跡を後世に末永く残してゆきたいものです。



(創建瓦)



(創建瓦)



三河国分寺跡出土軒瓦 $\frac{1}{5}$